

# 幼 兒 漫 談

水 谷 年 惠

## 一

ま唯今。」

ちい坊「……………」

女中「誰か來ましたか。」

ちい坊「來たよ。」

女中「やつぱり。今變な人が裏門から出て行きまし

たよ。おゝ、こはい。人さらひでしよ。」

ちい坊「うゝん違ふよ。蝙蝠直しだよ。」

女中「へえ！、蝙蝠直し——よくおわかりになりま

したね。」

ちい坊「聞いて見たよ。蝙蝠直しだと言つたよ。」

女中「まあ坊ちやま、あなた、何てお聞きになりま

したの。」

ちい坊「お前、人さらひかいつて。

女中「坊ちやま、ねえやが一寸角の魚屋まで行つて

參りますからね、何處へもいらつしつてはいけ

ませんよ。ちやんとおうちにはいらつしやるので

すよ。人さらひが來て、遠い所へ連れていつて

しまふと大變ですから、ちやんとおうちにはいら

つしやいね。」

ちい坊「うん、ゐるよ。」

女中「ぢや、いつて參ります。すぐ歸つて來ますか

らね。」

x x x x

女中「あらまあ氣味の悪い——人のうちの裏口を覗

いたりして、いやな人ね……」大聲に「坊ちや

女中「お前人さらひかいつて？そしたら。」

ちい坊「そしたら、『いゝえ、蝙蝠直しです。』つて言つたよ。」

## 二

父「さ、皆、いゝかい。父さんについて来るんだよ。父さんを離れちやだめだよ。たあ坊、父さんの肩にしつかりつかまつてお出でよ。花子、母さんの手を離しちやいけないよ。さ、お出で。」

母「まあ大變な火の子。髪の毛も着物も火の子で焼けるわ。」

父「其處まで焼けて來てはもうおしまひだ。」

母「うちも直ぐ焼けてしまふのね。何一つ取出す事も出來ず、着のみ着のまゝ逃げて行くのね。」

父「生命さへありやあ、又何でも出來るよ。たあ坊いゝかい。花子しつかりお歩き。」

x x x x

母「やつと森まで來ましたね。」

父「此處まで逃げて來りや、もう大丈夫だ。」

母「花ちゃん、さあ草の上へお坐り。」

花子「……………」

父「花子もう此處まで焼けて來はしないから安心してお出で。たあ坊さああんりしな。」

母「あら、たあ坊が何か持つてゐますよ。」

父「何だ、其の風呂敷包は。」

たあ坊「……………」

母「たあ坊の手から風呂敷包を取つて開く「あら、

ばちんこと磁石。」

父「あつは……………」

母「おほ……………」

花子「うふ……………」

父「たあ坊の財産だ。大事の大事の寶だ。」

母「たあちゃん、それで何するの。」

たあ坊「磁石で方角見るの、どつちへ逃げるか見る

の。」

母「へえ、ぢや、ばちんこは？」

たあ坊「木に止つてる小鳥をねらつて打つて、落ちて來たら、みんなで食べるの。」

父「あつは……………」

母「おほ……………」

花子「えへ……………」

父「たあ坊をいきなり抱上げて高く差上げ、」えら  
い、たあ坊、えらい、くくくくく。」

たあ坊大得意で「高いよ——高いよ——高いよ——」

### 三

姉「三ちゃん、一寸お坐り。あのね、八幡様のねお  
庭に豆が十あつたのよ。」

三郎「食卓の上に撒かれた菓子のおろを見て、そ  
れ豆ぢやないよ。おろぢやないか。」

姉「豆とするのよ。ね豆が十あるのよ。其處へ八  
幡様の鳩が飛んで來たのよ。」

三郎「八幡様の鳩？ 何處へ來たの、來やあしな

よ。」

姉「來たと假定するのよ。」

三郎「假定つてなあに？」

姉「おろを三つ掴みとつて、まあまあ、鳩がね、  
あしあし、あしあしつてね、豆をね、三つ食べ  
たのよ。そしたらあとに、もう幾つあつて。指  
で此の豆を、一つ二つと數へて御覽なさい。」

三郎「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ

——七つ。」

姉「どうくくく。七つよ。三ちゃんよくわかる

わね。」

姉「ぢやあね、お客様がね三人いらつしやつたの  
よ。其のお客様にね、お蜜柑をね、二つづゝ差

上げるのよ。幾つお蜜柑があつたらいいの。」

三郎指を折りながら「一つ、二つ。三つ、四つ。五つ、  
六つ。」

姉「あらまあ、えらいはね。三ちゃんよく出来ました。も一つしませうね、姉さんがね、鉛筆を十本もつてるのよ、それから三ちゃんが六本持つてるの、そしたら姉さんのと、三ちゃんのと合せて何本になるの。」

三郎指を折りながら「一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本、九本、十本——（兩手を握りこぶしにしたまゝ）誰かお手を貸してよう——」

## 四

まり子家の前の往還に立つてゐる。向ふから百姓鍬をかついで来る。

まり子「をぢさん、何處へ行くの。」

百姓「畑へ行くの。」

まり子「何しに行くの。」

百姓「芋掘りに。」

馬子馬をひいて来る。

まり子「をぢさん、何處へ行くの。」

馬子「遠くの町へ。」

まり子「何しに行くの。」

馬子「馬引いて行くの。」

おかみさん「笹を持って来る。」

まり子「をばさん、何處へ行くの。」

おかみさん「豆腐屋へ行くの。」

まり子「何しに行くの。」

おかみさん「豆腐買ひに。」

寺の小僧口笛吹きながら来る。

まり子「何處へ行くの。」

小僧「おうちへ歸るの。」

まり子「何しに歸るの。」

小僧「お萩食べに歸るの。」

まり子家へ駆込んで、

まり子「母ちゃん、まり子にもお萩ちやうだい——」

× × ×

× × ×